

2.6 [火]

第17回 読響アンサンブル・シリーズ
よみうり大手町ホール／19時30分開演(18時50分から解説)
Yomikyo Ensemble Series, No. 17
Tuesday, 6th February, 19:30 (Pre-concert talks from 18:50) / Yomiuri Otemachi Hall

※出演者と曲目のみ掲載しています。曲目解説は当日別紙を配布予定です。

《上岡敏之と読響木管メンバーによる室内楽》

ピアノ／上岡敏之 フルート／倉田 優 (読響首席)
Piano TOSHIYUKI KAMIOKA Flute YU KURATA

オーボエ、イングリッシュ・ホルン／北村貴子
Oboe, English Horn TAKAKO KITAMURA

クラリネット／金子 平 (読響首席) ファゴット／井上俊次 (読響首席)
Clarinet TAIRA KANEKO Bassoon TOSHITSUGU INOUE

ホルン／日橋辰朗 (読響首席)
Horn TATSUO NIPPASHI

ナビゲーター／鈴木美潮 (読売新聞東京本社 社長直属教育ネットワーク事務局専門委員)
Navigator MISHIO SUZUKI

ビュッセル カンテコール 変ロ短調 作品77 (Hr&Pf) [約6分]
BÜSSER / Cantecor in B flat minor, op. 77

ヒンデミット イングリッシュ・ホルン・ソナタ (Eh&Pf) [約12分]
HINDEMITH / English Horn Sonata

ベートーヴェン セレナーデ ニ長調 作品41 (Fl&Pf) [約25分]
BEETHOVEN / Serenade in D major, op. 41
I. Entrata: Allegro
II. Tempo ordinario d'un menuetto
III. Molto allegro
IV. Andante con variazioni
V. Allegro, scherzando e vivace
VI. Adagio
VII. Allegro vivace e disinvolto

[休憩 Intermission]

ルーセル デイヴェルティスマン 作品6 (六重奏) [約7分]
ROUSSEL / Divertissement, op. 6

プーランク ピアノと木管のための六重奏曲 [約18分]
POULENC / Sextet for Piano and Wind Quintet
I. Allegro vivace : Très vite et emporté
II. Divertissement : Andantino
III. Finale : Prestissimo

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団

2.10 [土]

第204回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール／14時開演
Saturday Matinée Series, No. 204
Saturday, 10th February, 14:00 / Tokyo Metropolitan Theatre

2.11 [日・祝]

第204回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール／14時開演
Sunday Matinée Series, No. 204
Sunday, 11th February, 14:00 / Tokyo Metropolitan Theatre

2.12 [月・休]

第101回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
横浜みなとみらいホール／14時開演
Yokohama Minato Mirai Holiday Popular Series, No. 101
Monday, 12th February, 14:00 / Yokohama Minato Mirai Hall

指揮／ユーリ・テミルカーノフ (名誉指揮者)
Honorary Conductor YURI TEMIRKANOV

P.6

ピアノ／ニコライ・ルガンスキー Piano NIKOLAI LUGANSKY

P.7

特別客演コンサートマスター／日下紗矢子
Special Guest Concertmaster SAYAKO KUSAKA

チャイコフスキー ピアノ協奏曲 第1番 変ロ短調 作品23 [約32分]
TCHAIKOVSKY / Piano Concerto No. 1 in B flat minor, op. 23

P.8

I. Allegro non troppo e molto maestoso - Allegro con spirito
II. Andantino semplice
III. Allegro con fuoco

[休憩 Intermission]

ラフマニノフ 交響曲 第2番 ホ短調 作品27 [約60分]
RACHMANINOFF / Symphony No. 2 in E minor, op. 27

P.9

I. Largo - Allegro moderato
II. Allegro molto
III. Adagio
IV. Allegro vivace

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
[協賛] NTTコミュニケーションズ株式会社 (2/10)
[助成] 文化庁文化芸術振興費補助金 (舞台芸術創造活動活性化事業)
[事業提携] 東京芸術劇場 (2/10、11)
[協力] 横浜みなとみらいホール (2/12)



文化庁

2.16 [金]

第575回 定期演奏会
サントリーホール/19時開演
Subscription Concert, No. 575
Friday, 16th February, 19:00 / Suntory Hall

指揮/ユーリ・テミルカーノフ (名誉指揮者)

Honorary Conductor YURI TEMIRKANOV P.6

ピアノ/ニコライ・ルガンスキー Piano NIKOLAI LUGANSKY P.7

コンサートマスター/長原幸太 Concertmaster KOTA NAGAHARA

チャイコフスキー 幻想曲〈フランチェスカ・ダ・リミニ〉 作品32
TCHAIKOVSKY / Francesca da Rimini, op. 32 [約22分] P.10

ラフマニノフ パガニーニの主題による狂詩曲 作品43 [約22分] P.11
RACHMANINOFF / Rhapsody on a Theme of Paganini, op. 43

[休憩 Intermission]

ラヴェル 組曲〈クーペランの墓〉 [約17分] P.12
RAVEL / "Le tombeau de Couperin" Suite
I. 前奏曲
II. フォルラーヌ
III. メヌエット
IV. リゴードン

レスピーギ 交響詩〈ローマの松〉 [約23分] P.13
RESPIGHI / Pini di Roma
I. ボルゲーゼ荘の松
II. カタコンブ付近の松
III. ジャニコロの松
IV. アッピア街道の松

※一部曲目が当初予定から変更されました。

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
[助成] 文化庁文化芸術振興費補助金 (舞台芸術創造活動活性化事業)
[協力] アフラック



※本公演では日本テレビ「読響シンフォニックライブ」の収録が行われます。文化庁

2.20 [火]

第609回 名曲シリーズ
サントリーホール/19時開演
Popular Series, No. 609
Tuesday, 20th February, 19:00 / Suntory Hall

2.21 [水]

非破壊検査 Presents 第19回 大阪定期演奏会
フェスティバルホール/19時開演
Subscription Concert in Osaka, No. 19, presented by Non-Destructive Inspection Co., Ltd. Wednesday, 21st February, 19:00 / Festival Hall

2.22 [木]

名曲シリーズ 福岡公演
福岡シンフォニーホール/19時開演
Popular Series in Fukuoka
Thursday, 22nd February, 19:00 / Fukuoka Symphony Hall

指揮/ユーリ・テミルカーノフ (名誉指揮者)

Honorary Conductor YURI TEMIRKANOV P.6

ヴァイオリン/レティシア・モレノ Violin LETICIA MORENO P.7

コンサートマスター/長原幸太 Concertmaster KOTA NAGAHARA

グリムカ 歌劇〈ルスランとリュドミラ〉序曲 [約5分] P.14
GLINKA / "Ruslan and Lyudmila" Overture

プロコフィエフ ヴァイオリン協奏曲 第2番 短調 作品63 [約26分] P.15
PROKOFIEV / Violin Concerto No. 2 in G minor, op. 63
I. Allegro moderato
II. Andante assai
III. Allegro, ben marcato

[休憩 Intermission]

ドヴォルザーク 交響曲 第9番 短調 作品95 〈新世界から〉 [約40分] P.16
DVORÁK / Symphony No. 9 in E minor, op. 95 "From the New World"
I. Adagio - Allegro molto
II. Largo
III. Molto vivace
IV. Allegro con fuoco

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、FBS福岡放送 (2/22)、読売日本交響楽団
[共催] (公財)アクロス福岡 (2/22)
[特別協賛] 非破壊検査株式会社 (2/21)
[助成] 文化庁文化芸術振興費補助金 (舞台芸術創造活動活性化事業) (2/20)
[後援] 福岡市・福岡市教育委員会 (2/22)
[協力] コジマ・コンサートマネジメント (2/21)、福岡北東・福岡西南・筑後各読売会 (2/22)
[マネジメント] キョードー (2/21)、エムアンドエム (2/22)



文化庁

ユーリ・ テミルカーノフ

(名誉指揮者)
Yuri Temirkanov

世界的巨匠が聴かせる
珠玉のロシア名曲

2015年に読響名誉指揮者に就任した世界的巨匠が、2年半ぶりに読響の指揮台に帰ってくる。今回はチャイコフスキー、ラフマニノフ、プロコフィエフ、ドヴォルザークなど名曲の数々を披露する。

1938年、旧ソ連・コーカサス地方のナルチク生まれ。66年に全ソ連指揮者コンクールで優勝し、レニングラード・フィル(現サンクトペテルブルク・フィル)でムラヴィンスキーのアシスタントに任命された。その後、レニングラード響の首席指揮者、キーロフ劇場(現マリインスキー劇場)の音楽監督などを経て、88年からサンクトペテルブルク・フィルの音楽監督の地位にあり、現在までロシア音楽界の頂点に君臨し続けている。

欧米では、ロイヤル・フィルの首席指揮者、ドレスデン・フィル、デンマーク国立放送響の首席客演指揮者、ボルティモア響の音楽監督などの要職を務めた

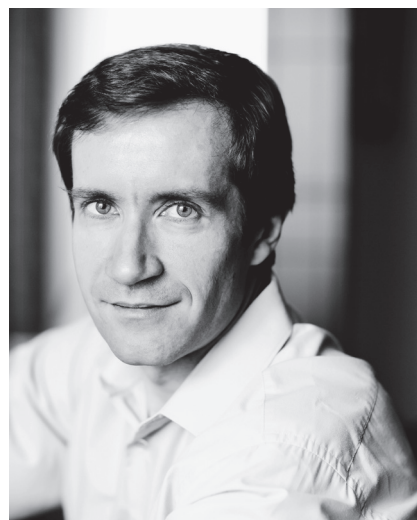


©読響

ほか、客演指揮者としてウィーン・フィル、ベルリン・フィル、ロンドン響、ロイヤル・コンサートヘボウ管、ニューヨーク・フィル、フィラデルフィア管、ポストン響、シカゴ響、クリーヴランド管など、世界中の一流楽団と共演を重ねている。

読響には2000年から客演し、ロシア音楽を中心としたレパートリーで圧倒的な名演を披露してきた。今回が7回目の共演となる。

- ◇ 2月10日 土曜マチネーシリーズ
- ◇ 2月11日 日曜マチネーシリーズ
- ◇ 2月12日 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
- ◇ 2月16日 定期演奏会
- ◇ 2月20日 名曲シリーズ
- ◇ 2月21日 大阪定期演奏会
- ◇ 2月22日 名曲シリーズ 福岡公演



©Marco Borggreve

ピアノ ニコライ・ルガンスキー

Piano Nikolai Lugansky

現代ロシアを代表するピアノの名手が、読響と初共演を果たす。1972年モスクワ生まれ。モスクワ音楽院で名ピアニストのニコラーエフ、ドレンスキーに師事し、94年のチャイコフスキー・コンクールで最高位(1位なしの2位)に入賞。水際立った技巧とみずみずしい叙情で高い評価を受け、世界的名声を確立した。これまでにテミルカーノフ、プレトニョフ、ヴァンスカらの指揮の下、欧米の一流オーケストラに客演を重ねるほか、室内楽でもヴァイオリンのレーピンやチェロのマイスキーらと共に演じている。

- ◇ 2月10日 土曜マチネーシリーズ
- ◇ 2月11日 日曜マチネーシリーズ
- ◇ 2月12日 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
- ◇ 2月16日 定期演奏会



©Omar Ayyashi

ヴァイオリン レテイシア・モレノ

Violin Leticia Moreno

マドリッド生まれの気鋭のヴァイオリニスト。地元のソフィア王妃高等音楽院とケルン音楽大学で名教師ブロンに師事し、シェリング、ノボシビルスク、サラサーテ、クライスラーなどの国際コンクール入賞で頭角を現した。2012年に欧州を代表する新人賞ECHOライジングスターに選ばれて注目を集め、メータ、テミルカーノフ、ゲルギエフ、ドゥダメル、サロネンらの指揮で、サンクトペテルブルク・フィル、マリインスキー歌劇場管、マーラー室内管などに客演。リサイタル、室内楽でも活躍する。読響初登場。

- ◇ 2月20日 名曲シリーズ
- ◇ 2月21日 大阪定期演奏会
- ◇ 2月22日 名曲シリーズ 福岡公演

2.10 [土]

2.11 [日・祝]

2.12 [月・休]

林 昌英 (はやし まさひで)・音楽ライター

チャイコフスキー
ピアノ協奏曲 第1番 変ロ短調 作品23

作曲：1874～75年／初演：1875年10月25日、ボストン／演奏時間：約32分

ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー(1840～93)は、法務省の役人を経て、ペテルブルク音楽院に入学した。音楽家としては後発の彼を、卒業直後にモスクワ音楽院の教師に抜擢したのが、創設者のニコライ・ルビンシテインで、以来ふたりは深い信頼関係を結んだ(81年ニコライ死去の際には、ピアノ三重奏曲『偉大な芸術家の思い出』を捧げて悼んだ)。

しかし、現在では別格の人気を誇るピアノ協奏曲第1番を巡っては、紆余曲折もあった。恩師ニコライに初演を頼むつもりだったが、「陳腐、演奏不能」とまさかの酷評を受け、チャイコフスキーは「一音符も変えない」と憤り、ドイツの名指揮者・ピアニストのハンス・フォン・ビューローに献呈。ビューローは本作を絶賛し、アメリカ

の演奏旅行で取り上げて成功を取めた。その後、ニコライは考えを改め、モスクワ初演の指揮を担当、ソリストとしても各地で愛奏した。また、チャイコフスキーも後年には改訂を行い、いまの名曲の姿になったのである。

第1楽章 劇的かつ雄大な序奏は、本作の顔とも言える有名なもの。主部は大規模なソナタ形式で、ピアノの技巧と表現力が最大限に発揮される。

第2楽章 幻想的な風景が浮かぶような緩徐楽章。中間部はシャンソンの引用による楽しい旋律が現れる。

第3楽章 ソナタ風のロンド形式。舞曲的な第1主題と、優美な第2主題が柱となる。終盤最高潮の場面ではピアノの走句の直後にオーケストラが第2主題を歌いあげ、圧倒的な終結を迎える。

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部、独奏ピアノ

ラフマニノフ
交響曲 第2番 ホ短調 作品27

作曲：1906～07年／初演：1908年2月8日、ペテルブルク／演奏時間：約60分

セルゲイ・ラフマニノフ(1873～1943)は、少年期にモスクワでチャイコフスキーと出会って才能を高く評価され、以来彼を心の師と仰いだ。1893年のチャイコフスキー急死の際には、彼に倣ってピアノ三重奏曲(第2番)を捧げ、故人への深い思いを表している。

そんなラフマニノフにとって、交響曲での成功は悲願だったが、1897年に行われた交響曲第1番の初演は無残な失敗に終わってしまい、3年近く作曲から離れた。その間は指揮活動を中心に経験を積み重ねて、1901年初演のピアノ協奏曲第2番の大成功以降、公私ともに充実期に入っていく。04年にはモスクワのポリショイ劇場の指揮者のポストを得て活躍したが、負担も大きく2年で辞任。05年に起きた第1次ロシア革命の影響もあり、一時的に母国を離れることを決意、06年にドイツのドレスデンに移って約3年を過ごした。

ドレスデンでは落ち着いて作曲に専念できたことから、懸案となっていた交響曲にも取り組み、07年に完成したのが交響曲第2番。オーケストラの絢爛たる響きで、旋律美と高揚感を満喫

できる大作となった。初演は08年にペテルブルクで行われ、今度は成功を取めた。なお、第1番の初演地も同じくペテルブルク。10年以上を経て、因縁の地で見事に捲土重来を果たしたのである。**第1楽章** 重い空気の中から旋律が浮かび上がってくる序奏と、ほの暗い情熱に満ちた重厚な主部による、長大なソナタ形式の楽章。

第2楽章 スケルツォ楽章。疾駆する勇ましい主題と優しい楽想による主部に挟まれて、中間部は無窮動的な性格をもつフーガが展開される。

第3楽章 甘美を極めるアダージョの緩徐楽章。心をつかむヴァイオリンのテーマに続き、クラリネットが長く切ない旋律を歌う。映画やドラマで使われることも多い、感動的な一篇。

第4楽章 祝祭的なフィナーレ楽章。動的な第1主題と、弦楽器で歌われる第2主題を中心に進む。最後には第2主題の再現で雄渾なクライマックスを作るが、これはチャイコフスキーのピアノ協奏曲第1番に倣って、ラフマニノフが自身の協奏曲でも好んで取り入れた構成である。

楽器編成／フルート3(ピッコロ持替)、オーボエ3(イングリッシュ・ホルン持替)、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器(大太鼓、シンバル、小太鼓、グロックンシュピール)、弦五部

柴辻純子 (しばつじ じゅんこ)・音楽評論家

チャイコフスキー

幻想曲〈フランチェスカ・ダ・リミニ〉 作品32

作曲：1876年／初演：1877年3月9日（ロシア暦2月25日）、モスクワ／演奏時間：約22分

1876年8月、ピョートル・チャイコフスキー（1840～93）は、バイロイト祝祭劇場で行われたワーグナー〈ニーベルングの指環〉の全曲初演に臨席した。その音楽を「荒唐無稽」としながらも、ワーグナーの「恐るべき才能」に圧倒されたチャイコフスキーは、モスクワに戻るとすぐに、新たな作品の構想を練り、わずか1か月半で中世イタリアの詩人ダンテの『神曲』地獄篇の第5歌をもとにした、幻想曲〈フランチェスカ・ダ・リミニ〉を完成させた。

当初はオペラ化も考えた、作曲家にとって思い入れの深い題材で、自筆譜にダンテの詩を掲げた。物語は、作者であり主人公のダンテが古代ローマの詩人ウェルギリウスの影に案内され、地獄の底で愛し合う男女の魂に出会う。フランチェスカが語るには、恋人パオロの兄と結婚させられたが、パオロとの密会の場で二人は嫉妬した夫に殺害

された。語り終えると彼女はパオロに抱かれ、吹き荒ぶ嵐の中に消え去った。

この作品は、チャイコフスキーがモスクワ音楽院で教えた作曲家タネーエフに献呈された。彼に宛てた手紙に「自分では嫌悪しているのにワーグナーの影響があることは確かです」（1878年）と書いたように、劇的な迫力に満ちた表現はワーグナーの音楽を思わせる。

地獄の門をくぐる導入部（アンダンテ・ルグーブレ）は、低弦とファゴットの重苦しい旋律に不安気な管楽器が絡まる。地獄に嵐が吹き荒れ、絶望と嘆きの声が渦巻く主部（アレグロ・ヴィーヴォ）は劇的に高揚する。クラリネット独奏に導かれる中間部（アンダンテ・カンタービレ・ノン・トロppo）では、二人の悲恋が語られ、クラリネットの愛の主題に弦楽器の心揺さぶる旋律が応える。様々な楽器の対話を経て、力強い主部が戻ってくる。

楽器編成／フルート3（ピッコロ持替）、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、コルネット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（シンバル、大太鼓、銅鑼）、ハーブ、弦五部

ラフマニノフ
パガニーニの主題による狂詩曲 作品43

作曲：1934年／初演：1934年11月7日、ボルティモア／演奏時間：約22分

セルゲイ・ラフマニノフ（1873～1943）は、ロシア革命勃発で緊迫した祖国を1917年末に離れ、スカンジナビア諸国を経て、翌年秋にアメリカに渡った。ラフマニノフの登場は大いに歓迎されたが、新天地では作曲家としての活動よりも、ピアニストとして舞台に立つことが期待された。12度（1オクターヴと完全5度）を軽々とつかむことができる大きな手と2メートル近い長身から繰り出される力強い響き、溢れ出る豊かな表現力で、アメリカの聴衆を熱狂させ、20世紀前半を代表するピアニストとして活躍した。

独奏ピアノと管弦楽による〈パガニーニの主題による狂詩曲〉は、アメリカ移住後に書かれた数少ない作品のひとつで、1934年の夏にスイスのルツェルン湖畔の別荘で作曲された。ニコロ・パガニーニ（1782～1840）の無伴奏ヴァイオリンのための〈24の奇想曲〉第24番の主題は、多くの作曲家に創作のインスピレーションを与えてきたが、ラフマニノフは、この主題をもとに万華鏡のように様々に変化する24の変奏曲を書き、それに9小節の序

奏とコーダを加えた。

冒頭から凝った作りで、普通は主題が提示された後に変奏曲が続くところ、ここでは序奏（イ短調）→第1変奏→主題と順番を入れ替えた。ゆるやかなテンポの第7変奏では、グレゴリオ聖歌の「怒りの日」の旋律が独奏ピアノの荘重な和音で現れ、この旋律はさらに第10変奏や終結部でも独奏ピアノではっきりと浮かび上がる。後にこの作品は、振付師フォーキンによってバレエ化されるが（1939年にロンドンで初演）、その際ラフマニノフは、悪魔に魂を売って超絶技巧を手に入れたというパガニーニにまつわる伝説から着想を得たこと、「怒りの日」の旋律はその象徴であることを語った。

独奏ピアノのみで開始される華麗な第15変奏（ヘ長調）、短調に転調した変奏曲をはさみ、有名な第18変奏（変ニ長調）では甘美な憧れに満ちた旋律がたっぷりと歌われ、ラフマニノフの音楽が香り立つ。そして最も長大な第22変奏（イ短調）の後には、華やかな終結部に向けて、力強く突き進み、最後は軽やかに曲を閉じる。

楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（グロッケンシュピール、シンバル、サスペンデッド・シンバル、小太鼓、トライアングル、大太鼓）、ハーブ、弦五部、独奏ピアノ

ラヴェル 組曲〈クープランの墓〉

作曲：1914～17年（ピアノ版）、1919年（管弦楽版）／初演：1920年2月28日、パリ（管弦楽版）／演奏時間：約17分

モーリス・ラヴェル（1875～1937）の6曲の小品から成るピアノ組曲〈クープランの墓〉は、1914年に作曲が開始された。この年にはほぼ完成していたようだが、第一次世界大戦への従軍による中断を経て、1917年に書き上げられた。6曲はそれぞれ、大戦で戦死した友人たちの思い出に捧げられている。ラヴェルは自作のピアノ曲をしばしば管弦楽化しているが、この作品もそこから4曲を選び、「リゴードン」と「メヌエット」の配列を逆にして、1919年に小編成の管弦楽用に編曲。翌年、ルネ・バトン指揮のパドルー管弦楽団によって初演された。

ラヴェルはこの作品について、「クープランただひとり」というより、18世紀フランス音楽全体に捧げられたオマージュ」と語っている。18世紀フランスのクラヴサン音楽の伝統や古典組曲の形式を念頭に置きながら、ラヴェル独自の鮮やかな響きの世界を作り上げた。日本語で「墓」と直訳される「トンボー（Tombeau）」という言葉だが、18世紀のフランスの詩や器楽でよく用いられ、「故人を偲んで」あるいは

「故人を称えて」といった意味をもつ。この作品も親しい友人たちに捧げられたが、深い悲しみや感傷的な思いが直接音楽に投影されることはない。むしろ澄みきった書法で、どこまでも慎ましく洗練された音楽に仕上がっているのは、ラヴェル特有の表現であろう。

第1曲“前奏曲” 古典組曲の伝統を踏まえて置かれた快活な曲。オーボエの旋回する絶え間ない動きにクラリネットが彩りを添え、軽やかに進められる。

第2曲“フォルラーヌ” 北イタリア起源の付点リズムを特徴とする宮廷舞曲。謎めいた雰囲気の問題が、新しい主題をはさみ、様々な楽器で反復される。

第3曲“メヌエット” ラヴェルがワルツとともに好んだ舞曲。音楽はオーボエの穏やかな主題に導かれる。中間部「ミュゼット」は、18世紀フランスで流行したバグパイプの音色を模した舞曲。低音の持続音に特徴がある。

第4曲“リゴードン” 南仏プロヴァンス起源の舞曲。ラモーのオペラのバレエ部分でも用いられた。ここでは2拍子の快活なリズムが際立ち、民謡風の間部は、音楽に陰影を与える。

楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ2（イングリッシュ・ホルン持替）、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット、ハーブ、弦五部

レスピーギ 交響詩〈ローマの松〉

作曲：1923～24年／初演：1924年12月14日、ローマ／演奏時間：約23分

プッチーニ以降のイタリア音楽界を代表する作曲家、オットリーノ・レスピーギ（1879～1936）は、オペラも手がけたが、その本領は管弦楽曲や器楽曲で発揮された。音楽家の父のもとにポーロニャで生まれ、当地の音楽院でヴァイオリンと作曲を学び、まずは弦楽器奏者として活動を始めた。ロシアの歌劇場の管弦楽団の首席ヴィオラ奏者や弦楽五重奏団のヴァイオリン奏者を務め、ロシア滞在中はリムスキー＝コルサコフに作曲の指導を受けた。1913年にサンタ・チェチーリア音楽院の作曲科教授に就任するとローマに移り、生涯その地で暮らした。

ローマを心から愛したレスピーギは、この古都の美しい風景や史跡から多くの刺激を受けた。交響詩〈ローマの松〉は、〈ローマの噴水〉（1916年）、〈ローマの祭〉（1928年）とともにローマ三部作として知られ、1924年に作曲された。樹木は、長い時を経ても同じ場所に立ち、人々の生活を見つめ、歴史的な出来事の証人にもなり得る。この作品では名所旧跡の松の木をめぐる情景が、舞台外の金管や録音された鳥の声、打

楽器やハーブ、チェレスタ、ピアノ等を多用した華やかな管弦楽法で描かれる。全体は4曲から成り、続けて演奏される。

第1曲“ボルゲーゼ荘の松” ローマの中央に位置するボルゲーゼ庭園（17世紀にボルゲーゼ枢機卿が建造した）の松並木で、子供たちが楽しそうに遊んでいる。チェレスタやトライアングルを含む輝かしい音色の賑やかな音楽。

第2曲“カタコンブ付近の松” 地下墓地の入口に立つと、その奥底から嘆きの歌が響いてくる。低弦と木管のゆるやかな旋律が静かに揺れ動き、舞台外のトランペットの清らかな旋律に導かれて音楽は高まった後、再び深く沈む。

第3曲“ジャニコロの松” ローマの街並みが一望できる小高い丘。ピアノが情景を一変させ、月明かりが輝くなか、クラリネットの懐古的な歌が始まる。夜が明けると小鳥の鳴き声が広がる。

第4曲“アッピア街道の松” 古代ローマの進軍道路だったアッピア街道。軍隊の足音は次第に近づき、勇壮な音楽に舞台外の6本の金管の力強いファンファーレが響き渡る。

楽器編成／フルート3（ピッコロ持替）、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（グロッケンシュピール、銅鑼、トライアングル、シンバル、サスペンデッド・シンバル、タンブリン、大太鼓、ラチェット）、ハーブ、チェレスタ、ピアノ、オルガン、バンダ（トランペット4、トロンボーン2）、ナイチンゲールの鳴き声の録音、弦五部

2.20 [火]

2.21 [水]

2.22 [木]

飯尾洋一 (いいお よういち)・音楽ライター

グリンカ

歌劇〈ルスランとリュドミラ〉序曲

作曲：1842年／初演：1842年12月9日、サンクトペテルブルク／演奏時間：約5分

19世紀ロシア国民楽派の父と呼ばれる作曲家ミハイル・グリンカ(1804～57)の作品で、現在もっともよく演奏されるのがこの歌劇〈ルスランとリュドミラ〉序曲だろう。

1836年、グリンカは愛国的な筋立てを持った歌劇〈皇帝にささげた命〉の初演によって大成功を取めた。続いて、グリンカは第2作のオペラの題材として、アレクサンドル・プーシキンの長編詩「ルスランとリュドミラ」を選んだ。当初、グリンカはプーシキン自身が台本を用意することを望んでいたが、プーシキンは1837年に決闘によって受けた傷がもとで世を去ってしまう。そのため、台本はヴァレリアン・シルコーフら数名の共作によって書かれることになった。

たびたびの中断期間をはさみながら、全5幕からなる全曲を完成すると、グリンカは1842年にこれを宮廷劇場

に提出し、上演が認められた。折しもロシアを訪問していたリストが作品に関心を示したこともあって、グリンカは大きな期待を抱いて初演に臨んだが、聴衆の反応は冷ややかで、公演を重ねるごとに次第に評価を高めていったという。

物語の舞台は、古代ロシアのキエフ公国。キエフ大公の娘リュドミラが悪魔によりさらわれるが、求婚者である騎士ルスランが数々の困難に打ち勝ちながらリュドミラの救出に成功し、ふたりは結ばれる。

序曲冒頭は力強くさっそうと開始される。第5幕のフィナーレで登場する祝祭的な音楽が用いられている。続いて第2幕のルスランのアリアに由来する、のびやかな主題が奏でられる。はつらつとしてスピード感あふれる楽想が、輝かしいコーダまで一気呵成に駆け抜ける。

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部

プロコフィエフ
ヴァイオリン協奏曲 第2番 ト短調 作品63

作曲：1935年／初演：1935年12月1日、マドリッド／演奏時間：約26分

1918年に祖国を離れ、アメリカ、そしてパリに移り住むも、1936年にソ連に完全帰国したセルゲイ・プロコフィエフ(1891～1953)。その帰国前年に書かれたのが、ヴァイオリン協奏曲第2番である。

1935年、プロコフィエフはフランスのヴァイオリニスト、ロベール・ソエタンのファンたちから、彼のために新作のヴァイオリン協奏曲を作曲し、独占的な演奏権を一年間与えるように依頼された。ちょうどヴァイオリンのための作品を構想中だったプロコフィエフは、これを喜んで承諾する。当初は〈ヴァイオリンとオーケストラのためのコンサート・ソナタ〉といったユニークな曲名を考えたものの、やがて曲名はシンプルにヴァイオリン協奏曲第2番と定められることになった。

当時、プロコフィエフは演奏旅行のために各地を巡っていたことから、第1楽章はパリで書かれ、第2楽章はロシアのヴォロネジで着手され、オーケストレーションはカスピ海沿岸のパクーで仕上げられることになった。1935年末、ソエタンとともにスペイン、ポ

ルトガル、モロッコ、アルジェリア他を巡るツアーの最中に、マドリッドで初演された。

第1楽章 アレグロ・モデラート 冒頭で無伴奏の独奏ヴァイオリンが、第1主題を奏でる。民謡風の哀愁を帯びつつも、どこか無機質な表情はプロコフィエフならではの。第2主題はのびやかで、ほのかにロマンティズムを漂わせる。鋭利で執拗な楽想から、冷やかな詩情が醸し出される。

第2楽章 アンダンテ・アッサイ 弦楽器のピッツィカートとクラリネットのスタッカートに乗って、独奏ヴァイオリンが甘美な旋律を奏でる。アレグレットの中間部は「ドルチェ」(甘く柔らかく)と指示される主題で開始され、とぼけたユーモアにもじませる。

第3楽章 アレグロ、ベン・マルカート エネルギッシュで輝かしいフィナーレ。舞曲風の主題で開始され、機知、憂愁、焦燥など、目まぐるしく表情を変転させる。カスタネットの使用は初演地スペインにあやかった趣向か。神経質な笑いを交えながら、熱狂的に曲を閉じる。

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、打楽器(シンバル、トライアングル、カスタネット、大太鼓、小太鼓)、弦五部、独奏ヴァイオリン

ドヴォルザーク

交響曲 第9番 ホ短調 作品95 〈新世界から〉

作曲：1893年／初演：1893年12月16日、ニューヨーク／演奏時間：約40分

プロコフィエフのヴァイオリン協奏曲第2番が旅から生まれたのと同様に、アントニン・ドヴォルザーク（1841～1904）の交響曲第9番〈新世界から〉もまた異国の地で誕生した作品である。

「新世界」とは、アメリカのこと。1891年、すでにチェコの作曲家として国際的な名声を獲得していたドヴォルザークのもとに思わぬオファーが届く。裕福な食品卸売業の夫を持つジャネット・サーバーから、ニューヨーク・ナショナル音楽院の院長に就任してほしいと依頼されたのである。サーバー夫人はアメリカに本格的な音楽院を設立することに情熱を注ぎ、院長としてドヴォルザークに白羽の矢を立てた。いったんは断られるものの、サーバー夫人はあきらめることなく破格の報酬を提示してドヴォルザークを説得した。交渉の末、ドヴォルザークは院長の職を受け、新大陸アメリカへと旅立った。もちろんジェット機が飛び交う現代とは事情が違う。船で12日間をかけてニューヨークに到着する長旅であった。

この決断はドヴォルザークに経済的報酬ばかりか、芸術上の大きな収穫を

ももたらすことになる。アメリカに渡ったドヴォルザークは、黒人霊歌や先住民の音楽に大きな関心を寄せた。新たに交響曲第9番を書きあげたドヴォルザークは、「この作品は以前のものとは異なり、わずかにアメリカ風である」と手紙に残している。アメリカ音楽から受けたインスピレーションと祖国への望郷の念が一体となって、歴史的な名作が生み出された。

第1楽章 アダージョ～アレグロ・モルト ゆるやかな序奏に、緊迫感みなぎる主部が続く。

第2楽章 ラルゴ イングリッシュ・ホルンが奏でる愁いを帯びたメロディは、「家路」としてあまりに有名。

第3楽章 スケルツォ、モルト・ヴィヴァーチェ 民俗舞曲を思わせる活発なスケルツォ。

第4楽章 アレグロ・コン・フォーコ あたかも機関車が徐々に速度をあげて爆走するかのように始まる。全曲でただ一度、シンバルが控えめに鳴る場面がある。この一音に対する説得力ある解釈例は「列車の連結音」。作曲者は大の鉄道ファンとして知られる。

楽器編成／フルート2(ピッコロ持替)、オーボエ2(イングリッシュ・ホルン持替)、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器(トライアングル、シンバル)、弦五部